

この空海の過ちは私の見解によって、「十住心論(じゅうじゅうしんろん)」という教判(きょうはん・・経典の優劣を判じること)を創作して、それまで広く仏教界全体で定説となっていた天台の五時八教(ごじはっきょう・・法華経の優位性が顕れていることを顕す教判)をひっくり返したことがもとです。この十住心論によれば、人の心に十段階があるとして、第八を一道無為住心(いちどうむいじゅうしん)・・天台宗の修行をなす人の心、つまり法華経、第九を極無自性住心(ごくむじしょうじゅうしん)・・華嚴宗の修行をなす人の心、つまり華嚴経、第十を秘密莊嚴住心(ひみつしょうごんじゅうしん)として真言宗の修行をなす人の心、つまり真言密教としているのです。こうして、「最為第一・・・最もこれ第一」(薬王菩薩本事品)と法華経を第一とした釈尊ご自身の言葉である経文を否定して、法華経を真言に比べれば「三重の劣」(華嚴経は二重の劣)としてしまったのです。

しかし、よく検討しますとおかしなことがたくさんあります。真言宗を真言密教ともいいますが、これは顕教に対するもので、大日如来という法身仏(真理そのもの)が説法した教えで顕教は応化身の釈尊が説いた教え、しかも密教は自内証の説、顕教は聴衆を考慮して手加減した隨機説であるといつて密教を優位としています。これはまったく説得力がありません。法身・・・真理そのものがどうして言葉を発することができるのでしょうか。

また、大日如来の説法が事実だとすれば真言経典は実在の釈尊が説かれた経文ではないことになり、もはや仏教であることを自ら否定していることになります。というより、実は、7~8世紀の真言経典の作者自身が、それまで知られていなかった真言経典が突如出現することになれば、これら真言経典は後世の偽作であるという非難を招くことを予想しながら書き上げているために大日如来が説いたという設定にしてあるのです。

そして、さらに真言宗でどのように教えが伝わったか、その系譜を語っていますが、これによれば、教主・大日如来が金剛(こんごう)薩?(さった)に法を受け、続いて龍猛(りゅうみょう)・・龍樹菩薩を密教では龍猛という)が南天竺(みなみてんじく)・・南インド)の鉄塔を開いて金剛薩?に對面口受(くじゅ)して伝法されたことになっています。ところが、龍猛以前にインドに密教の経典もなく密教を信奉していた人もなかったことがハッキリしています。これも仏教を研究した人なら皆、そのことを知っているのが分かっているのです、これをうまく合理化して説明するための意図的な伝説です。

そして真言の法は龍猛(2世紀から3世紀にかけて生存)から龍智(りゅうち)に、さらに龍智は金剛智(こんごうち)・・8世紀の人)に伝えたと言われます。もし、これが事実なら竜智は数百年の寿命であったというわけで辻褄の合わないことになります。これも正当な伝承がないことを覆い隠そうとするもので、人心を惑わすことになります。

また、以前にも四信五品抄の解説の中でふれたことがありますが、大日如来は阿弥陀如来と同じく、もともと、ペルシャに起源を有するミトラ神が仏教に混入して仏の名前になったもの、つまり仮面の仏です。そして、その修法とする真言、印契(いんげい=印相いんぞう)、護摩(ごま)などはすべて、インドの民俗宗教であるヒンドゥー教のそれと変わらず、正統仏教ではない混交宗教であることは明らかです。真言とはサンスクリットでマントラといい、呪文です。印契、印相とはムドラー(母陀羅)といい、仏や菩薩などの諸尊の誓願、功德などを象徴的に表現するもので特に仏像などの指の屈伸を中心とした手印、手のサインをいうのです。これはインドでは手の指などの姿で意志や感情を表現する習慣があったため、特に尊像を彫刻するときの約束事、あるいは舞踊にも取り入れられました。今でもインド舞踊やタイの踊りなどに見ることができます。

そして、立て前の教義はともかく、その宗教活動の実体は加持祈祷にあり、きわめて低次の呪術に仏教教理の衣を覆い被せたものといえるのです。占い、虫封じ、厄除け、神子寄せ(口寄せ)など、仏教の本道からかけ離れたことをやっているのです。

また、心に曼荼羅(まんだら)の諸尊を觀じ、口に真言を唱え、手に諸尊の印契、印相を結ぶとい

うのを三密瑜伽行(さんみつゆがぎょう)といい、これによって即身成仏するともいっています。すなわち、顕教では成仏の時間は極めて長いのですが、密教によれば、この現生(げんしょう)に成仏できるといい、これを即身成仏と称しています。でもその即身成仏というのは、実際は断食をして生きながらにしてミイラになることのように、時々、そういうミイラ化した真言僧侶の遺体が発見されたりしています。生きながらミイラになることと即身成仏とは同じではないと思いますがいかがでしょうか。